法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-21

北海道芦別市における主婦会活動の記録 ： 三井芦別炭鉱主婦会・芦別生活学校の聞き書き

大國，充彦 / 西城戸，誠

(出版者 / Publisher)
法政大学人間環境学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
人間環境論集 / 人間環境論集
(巻 / Volume)
18
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
64(1)
(終了ページ / End Page)
30(35)
(発行年 / Year)
2018-02-28
(URL)
https://doi.org/10.15002/00014429

北海道芦別市における主婦会活動の記録
――三井芦別炭鉱主婦会・芦別生活学校の聞き書き――

西城戸誠・大國充彦

1　はじめに――調査対象と問題関心――

本稿の目的は、北海道芦別市における女性団体の聞き書きを通して、芦別市における女性（婦人）団体の活動の変遷と地域社会への影響に関する論点を提示することである。

まず本調査研究の経緯を述べておきたい。筆者らは、産炭地研究会（http//c-faculty.chuo-u.ac.jp/~nakazawa/）の中で、炭鉱主婦会の調査を担当し、二〇一〇年から炭鉱主婦会、炭婦協の関係者の聞き取り調査と、関係資料を蒐集してきた。具体的には、空知地方（赤平市、歌志内市、三笠市、芦別市）の炭鉱主婦会や、北海道の炭鉱主婦協議会、炭鉱を離れ都市部に移住した人々に対して結成された炭鉱離職者主婦の会の方への聞き取り調査を行い、住友赤平炭鉱主婦会会長、空知炭鉱主婦会会長・炭婦協会長、夕張炭鉱主婦会の会員の聞き書きを作成する一方で、炭鉱主婦会・炭婦協に対する評価に関する議論の簡単なレビューを行った（西城戸・大國、二〇一七）。本稿では、この一連の調査を踏まえつつ、北海道芦別市における炭鉱主婦会の関係者の聞き書きを作成し、収録した。

本稿の特徴は、第一に三井芦別炭鉱主婦会の複数の会長の聞き書きを通じて、三井芦別炭鉱主婦会の歴史的な経緯を、ある程度、通時的に追うことが可能になった点である。筆者らによる北海道における炭鉱主婦会・炭婦協に対する調査は、インフォーマントのリストもない全くの白紙状態からスタートし、北海道赤平市の住友赤平炭鉱主婦会の調査を皮切りに、関係者の知り合いを通じて調査対象者を広げていった。そのため、歴代の炭鉱主婦会の会長経験者を複数人、調査することができたのは、

三井芦別炭鉱主婦会のみであった。[1]

一九五三（昭和二八）年に三井芦別炭鉱主婦会が誕生し、一九九二（平成四）年の解散まで一六名の炭鉱主婦会会長がいる。筆者らは本稿の聞き書きで記した木村淑子氏、城戸幸子氏、岡部規子氏の他に、佐藤俊江氏、奥山啓子氏へのインタビューを行った。後者の二名については、聞き書きを作成することができなかったが、佐藤俊江氏は、自らの反省を振り返った『卒寿を超えて記憶と記録　ばあちゃんの歩んだ道』（二〇一二年）[2]があり、これは本稿での聞き書きの前提となる記録である。

佐藤氏は、三井芦別炭鉱主婦会が誕生した、一九五三（昭和二三）年に芦別へ移住し、三井芦別炭鉱主婦会の会長を四年間勤め、その後、日本炭鉱主婦協議会（炭婦協）北海道支部の副会長、会長を歴任し、中央炭婦協の書記長、会長も兼任、さらに北海道主婦協の事務局長、会長や、北海道平和婦人会の副会長、北海道母親大会の事務局長を担った。そして、佐藤氏の夫が定年退職後は、芦別市の消費生活指導員として活動した。佐藤氏の手記は、炭婦協活動が盛んであった時代における中央、北海道の炭婦協運動の成果が詳細に記されている。北海道の炭鉱主婦会、炭婦協の活動記録は、嶋津（一九六四）による戦後直後からの日本国内の炭鉱主婦会の叢生と炭婦協の結成のプロセスに関する記述と、日本炭鉱主婦協議会北海道地方本部が、設立二〇周年を記念して作成した『研山は知っている』（一九七三年）があるが、佐藤氏の手記はこれらの記録に並ぶ貴重なものであるといえるだろう。さらに、佐藤氏の手記は、芦別市における女性による市民活動の歴史なども記されている。本稿で作成した聞き書きの話者も、佐藤俊江氏の活動の影響を受けていることが見いだせる。

本稿の第二の特徴は、芦別市における炭鉱主婦会だけにとどまらず、労働組合の家族会や地域の婦人会が参加した「生活学校」に関する内容が含まれていることである。生活学校とは、新生活運動協会（一九五五年発足）が一九六〇年代半ばから提唱したもので、生活において新しく生起する問題の解決と実用的知識の修得を目指して、主婦自らが運営する組織である。新生活運動協会は「対

1　なお、北海道赤平市の住友炭鉱主婦会、歌志内市の空知炭鉱主婦会については、十数人の元主婦会会員への聞き取り調査を実施し、その知見は炭鉱主婦会会長の聞き書きの作成（西城戸・大國、二〇一七）や、炭鉱主婦会に関する論考（西城戸、二〇一八など）に反映させている。

2　同書は自費出版であるが、芦別市図書館に所蔵され、閲覧することができる。

話」をキーワードとして、生活学校において消費生活上の諸問題に取り組み、「生活会議」を組織し、新しいコミュニティの創造を目指した（大門正克、二〇一二：三）。

北海道では一九六五（昭和四〇）年から一二の生活学校（旭川、小樽、札幌、室蘭、登別、留萌、滝川、苫小牧、江別、岩見沢（二校）、千歳）が誕生した。芦別では、北海道新生活運動協会の呼びかけなどにより、芦別市婦人団体連絡協議会（一五団体）が主体となり、一九六六（昭和四一）年に、芦別生活学校（後の第一生活学校）が、炭鉱がある三井地区に設立された。同時に、芦別市の生活学校の連絡調整と共通課題の解決のために、芦別生活学校連絡協議会が発足している。その後、一九六九（昭和四四）年に芦別市街地において第二生活学校、農村地域において旭生活学校が誕生し、一九七六（昭和五一）年から上芦別生活学校、一九八七（昭和六二）年に、三井地区から本町地区への転出会員が中心となり、中央生活学校が誕生した。さらに、一九七九（昭和五四）年から一九八三（昭和五八）年まで野花南生活学校が開設されたが、農村地区の女性の多忙のため、短期間で閉鎖となっている。

芦別における生活学校では、食品添加物や有害農薬の問題、プロパンガスのメーター取り付け、灯油、クリーニングの価格などの物価問題、不要品の再活用や古紙や空き瓶回収といった省資源の活動、虚礼廃止といった生活の簡素化運動、有害図書の追放などの青少年の健全育成、食生活改善による健康づくり、高齢化社会への対応など、幅広い生活に関わる活動を展開した。[3]

さて、このような生活に関わる生活学校に対する研究は、日本の現代史研究の中で近年、注目を浴びている。その背景には、権威に対抗する社会運動という図式では、「国家や企業役員との協力、連携によって発展した混成タイプ」（ゴードン、二〇〇五）の運動や、「イデオロギーが不分明な運動」（大門編、二〇一二）が視野に入りづらいという内省がなされているからである。[4] そして「生活運動が戦後史のひとコマと扱われたり、家族計画のみ

3　芦別市生活学校連絡協議会『二〇周年記念誌　響――仲間とともに二〇年』（一九八八年）を参照した。

4　アンドルー・ゴートンは、戦後日本の社会運動の分析をする際に、「「支配体制」対「反政府運動」という配置と、国家から独立して発展した運動に限定する「社会運動」の叙述は、社会、政治活動の重要な混成タイプを説明できない。混成タイプの社会運動は、国家や企業役員との協力、連携によって発達したが、社会制度を変革する集団的努力のような「社会運動」と同様の特徴を持っている」（ゴードン、二〇〇五、二五四頁）と指摘している。

に関心が集まったりした理由は、運動の理解にもあったのである」（大門、二〇一二、八頁）と指摘し、大門正克らは、行政ルートで作られた団体との接点に着目、新生活運動の研究を進めている。例えば、満薗（二〇一二）は、一九六〇年代半ばから一九七〇年代の新生活運動協会が主導した生活学校運動の展開とその特徴を、「対抗的な運動」の例として生活クラブ生協との比較から次のように指摘している。

「本論の関心に即して生活クラブの特徴を要約すれば、企業主導で生み出される商品の世界から距離をとり、自らのうちに生活者の世界というオルタナティブを構築しようとする運動であるといえる。それは、交換価値をおびた消費「財」に異議申し立てを行い、共同予約購入という形で、自ら使用価値を追求した消費「材」を調達しようとする、その運動の基本線に端的に表れている。まさに、支配的な価値観に対する「対抗文化運動」という性格を強く帯びているのである。

それに対して、生活学校運動の場合は、企業、行政、消費者という各機能集団を結び合わせる共同性の拠り所を「生活者」に求めた。したがって、「生活者」はもちろん企業の論理を軌道修正させる価値を帯びているに違いないが、しかしそれは、企業（あるいは行政）をも包含した新しい「連帯」を可能にする基盤として設定されているのである。あえて対比的にいえば、生活クラブでは、消費者が「生活者」として閉じていく方向に対し、生活学校運動は、消費者を企業・行政と連帯可能な「生活者」という開かれた存在に位置づけ直す運動であったということができる。そして、こうした生活学校運動の方向性は、「対話」を重視するというそのアプローチに反映されている。」（満薗、二〇一二：一〇二―一〇三頁）

鬼嶋（二〇一二：二一九）も同様な指摘をしている。つまり、生活学校は食品添加物の問題に取り組んだものの、消費社会を根本的に問い直したわけではなく、共同購入の位置づけも経済的な利益をあげて運転資金に充てること、生産地の生活学校との関係を深めること、業者や流通関係者に対し、生活学校の主張を通すための「圧力」の役割を果たすものである。生活学校は、商品化社会を問い直し自覚的な協同関係を通して消費の本質を見直す活動であり、生活クラブ生協とは異なるとされる。その理由は、生活学校運動は、地域社会から孤立しない

ことを前提とし、行政、業者などと全面対立をしない範囲で「異質な対話」を重視する運動だからである。

筆者は、北海道の炭鉱主婦会や炭婦協と生活クラブ生協が、双方とも生活の問題から地方議会に議員を輩出するなど政治の活動まで、活動の広がりの類似性について指摘した（西城戸・大國、二〇一七）。産炭地における炭鉱主婦会と他の女性団体の付置連関や女性（婦人）団体の地域社会への影響といった問題関心を持つ筆者らからすれば、生活クラブ生協と、炭鉱主婦会、そして生活学校運動が対象とする「生活の課題」の深さと運動方法の相対的な違いについては、より慎重な議論が必要と考えている。したがって、ここでは生活学校運動が、生活クラブ生協などの「対抗的な運動」との差異の中で、特徴付けられているという点を確認しておきたい。

他方で、鬼嶋（二〇一二）は、中央の新生活運動協会の意図と地方生活学校の実態との関連、生活学校運動を組織のあり方や行政との関連や、女性にとっての生活学校の意味づけ、女性の主体化過程について考察している。新生活運動を主導した新生活運動協会は、アンドルー・ゴートンのいう「変革を管理し、抑制したい衝動と、草の根の支持者に力を与えたいという、相反する衝動とを結合した」（ゴードン、二〇〇五、二五九頁）動きであった。そして、行政が関与する運動団体であったにしろ、行政の下請け機関化した活動は、参加する女性（主婦）の主体性を失わせるが、生活学校運動の現場レベルの運営や、参加した女性の主体性は、新生活運動協会の関係性の中で左右されたと言ってよい。この点において、対抗性の担保と運動主体の主体形成のあり方という、社会運動研究を始め、社会教育の分野や、地域婦人会に関する歴史研究が問うてきた点と生活学校運動研究とは接続する。生活学校運動は、新生活運動協会からの指導があったり、行政、企業、地域社会と最終的には対立をしない「異質な対話」が可能なテーマを取り上げる必要があったりという限定はあるものの、地域社会の中で生活上の問題を取り上げ、具体的に問題を解決していった。こうした生活学校運動が展開する中で、従来の地域婦人会とは異なったグループを形成し「自分たちの運動」であるという意識を持つようになったという（鬼嶋、二〇一二、二二七頁）。これらの議論は、産炭地において、炭鉱主婦会などの婦人団体と、生活学校運動の質的な差異を考える上でポイントになるといえるだろう。

以上のように歴史学において、生活学校運動などの地

域の女性運動への着目がなされている一方で、都市社会学や地域社会学では、地域の女性運動、特に強い対抗性を持ち得ない母親による運動は、相対的に看過されてきた。一部のフェミニズムが、性別役割分業の呪縛から女性を解放させることと、女性の職場進出と経済的な自立が最優先されたことも手伝って、「主婦」による運動が否定的に捉えられてきたという背景も考えられるが、都市社会学、地域社会学においては、地域の女性（特に主婦）による運動を地域社会の中で捉える試みは数少ない。[5] 農村社会学の中では、農村における女性リーダーの創出過程を、女性が成人期に「再社会化」するためのエージェントやその機能を考察する試みがあるが、[6] 当該地域社会の中で女性の主体形成の場やそのプロセスに関する社会学的な研究は、今後の課題であるといえるだろう。このような問題関心を元に旧産炭地の地域社会と女性の関わりについて、本稿の聞き書きを元にして、別稿で議論を行いたいと考えている。

5　数少ない地域女性の運動に着目した都市／地域社会学の議論として玉野和志（二〇〇五）がある。また、北海道の重化学工業都市における婦人運動の役割について、鎌田とし子・鎌田哲宏（一九八三）の議論がある。

6　農村社会における女性リーダーの創出プロセスと「再社会化」に関する論考として、藤井和佐（二〇一一）がある。

2　聞き書きの概要

本稿では五人の聞き書きが収録されているが、聞き書き内容の概略を整理しておく。

まず、三井芦別炭鉱主婦会の会長経験者の三名（木村淑子氏、城戸幸子氏、岡部規子氏）は、奇しくも樺太で生まれていることがわかる。樺太では三井系列の炭鉱（三井川上炭鉱）もあり、同じ三井系列の炭鉱が芦別にあったことから、何らかの縁で芦別に移住してきたのであろう。また、木村氏、城戸氏、岡部氏の三人は、炭鉱主婦会との関わった時期や、会長の就任時期が異なるため、炭鉱主婦会の活動内容に対する思いも異なっていることがうかがえる。例えば、木村氏は殉職者の弔辞が一番の辛い思い出として語られる一方で、城戸氏は代表的な炭鉱主婦会の活動内容を語り、一方で、岡部氏は最後の炭鉱主婦会の会長として、大規模な合理化や人員整理がある中での閉山阻止闘争や、閉山時の生活の変化に関する話がなされている。

三人ともに炭鉱主婦会会長後は、地域でさまざまな活

動に関わっている点も共通している。木村氏は市役所の嘱託職員や裁判所の調停委員、保護司を務め、城戸氏は民生委員として活動している。岡部氏は主任児童委員と教育委員を経た後、芦別市議を三期務めた。このように、炭鉱主婦会の活動を続けた後、引き続き、地域社会に居住している場合は、地域の女性リーダーになっていることが見いだせる。

一方で、それぞれの聞き書きに特筆する点としては、木村氏の兄が日本炭鉱労働組合の中央執行委員長を勤めた野呂潔氏であり、短いながらもエピソードが語られていることが挙げられる。城戸氏については、一般的に炭鉱主婦会会長は激務であり、多くの経験者は忙しさを語るのに対し、城戸氏は母親と同居し、子供が一人であったこともあり、炭鉱主婦会会長の仕事は「少し忙しかった」程度という話をしている点が特徴的であろう。岡部氏は先述したように、閉山前後の炭鉱関係者の混乱とその対応について語られ、閉山後の産炭地の社会を考える上で貴重な証言であるといえる。

聞き書きの四人目は、炭鉱主婦会会員でありながら、夫が途中で職員となったため炭鉱主婦会を辞めた西村ツヤ子氏である。西村氏の聞き書きからは、夫が職員になったことで加入した職員組合の主婦会の活動が、炭鉱主婦会と異なり、ほとんどなかったことが指摘される。それゆえ、生活学校における活動が、炭鉱主婦会の関係性を維持したことが語られている。なお、同様の指摘は、夫が退職した後、炭鉱の女性たちとのつながりが生活学校にあったと木村氏が指摘している。

また、西村氏は、夫の定年に伴って居住地の変更にともなって、新たに生活学校（中央生活学校）を立ち上げたことを多く語っており、その中で生活学校が選挙の時には声がかかる場として機能していたという指摘もある。鬼嶋（二〇一二、二一三頁）は、「生活学校は地域から「政治的」に見られると衰退することがある」と指摘するが、炭鉱主婦会における政治活動（平和闘争）が日常的であった産炭地においては、一般的な生活学校の傾向とは異なっていたといえるかもしれない。

最後の聞き書きは、前田栄子氏である。前田氏は三井芦別炭鉱に直接的な関連はなく、夫が営林署に勤務していたことから、営林署の主婦会で活躍し、その後、芦別市生活学校連絡協議会会長を勤めた。芦別の生活学校に関して最も詳しい関係者の一人である。前田氏の聞き書きからは、前節で述べた生活学校に関する先行研究の知

見との共通性が見出される。それは主婦会（婦人会）と生活学校の活動内容の質的な違い（生活学校は自分たちで課題を見つけて解決をする）や、活動に対する達成感の違い（生活学校の方が高い）などである。

また、生活学校と消費者協会の活動の違いにも言及されている。消費者協会が物価問題に対して申し入れだけを行うのに対して、生活学校では物価問題懇談会という会合を開き、事業者や行政と同じテーブルにつき、話し合いによって解決するのである。「対話」を重視した生活学校運動の特徴がここでも読み取ることができる。

なお、炭鉱主婦会のリーダー層が地域の消費者協会の設立に力を尽くしたという例は多い。しかし、芦別市は各地で消費者協会の設立の機運が高まる前に、すでに生活学校が設立されていたこともあり、消費者協会は存在していないことに留意する必要がある。賢い消費者として商品の知識を得て、苦情を告発して問題の解決を他人に任せる「消費者教育」は、結果として行政が教育したい内容を教えることや、日本の産業界に貢献するような消費者を生み出す企業側の論理が優先され、主体的に学び問題を解決するという志向性と逆になるという指摘がある（原山、二〇一一、鬼嶋、二〇一二）が、芦別市における生活学校の展開が、芦別市民の消費者教育のあり方にどのように影響を与えたのかという問いについても、これらの聞き書きから導出されるといえる。

3　芦別の五人の女性の聞き書き

聞き書き①　木村淑子さん[7]

主婦会の活動から地域のための活動へ

■樺太での生活

昭和六年七月一三日、樺太・新問（にいとい）で生まれました。兄、私、弟ふたりの四人きょうだいでした。親は樺太での漁業権を持っていて、漁師をしていました。また、国境のそばに軍隊が駐屯していて、父はそこに馬で物資を輸送する仕事をしていました。おじいさんの代から漁業権や輸送する権利を持っていたようです。

漁業権をもっていた父は、カニなどを捕り、缶詰工場に出荷する仕事や、軍の仕事もしていました。父の仕

7　調査日時：二〇一〇年九月一二日、二〇一六年八月三日、二〇一六年一一月一二日。

事は、仕事をしてすぐにお金は入ってきませんが、後で必ずお金が入ってきます。だから、生まれた時は、私の家は、使用人がたくさんいる大きな家で、別棟もありました。

私の兄は、炭労新聞に樺太での生活のことを載せていたことがあり、その話からも生活にゆとりがあることがわかります。例えば、雪が降ると浜の舟が通らなくなるので、お米がなくなる家があります。私の家では仕事で人を使っているからお米をストックしていたのですが、樺太の人から、「雪が溶けて舟が通る時に必ず返すから、困っているために米を分けて欲しい」と言われたことがあるそうです。お米を分けるぐらい、うちはゆとりがある生活だったのです。

漁業権をもっていた父は、カニなどを捕ると缶詰工場にだしますが、決まった量を納めないといけないので、時にはアイヌの人から魚を回してもらっていたようです。父は社交的で、アイヌの人とも仲良くやっていました。アイヌの人が父親を気に入ってくれて、その人が「おれの嫁さんは一つ上だ」という話をされたので、その人に合わせて、「うちも同じだ」という話をしたそうです。

本当は、父は母よりも四つ年上で、この話を私にしながら母は少し怒っていましたが、父はアイヌの人と仲良くして、機転を利かせたのだと思います。

母はおしゃれをせずに、よく働いていました。お客さんが来ると、ぱっと着替えて、おもてなしをしていました。まるで忍者のようでした。

ところが、村長選挙の時に、親戚同士が立候補し、その片方を父親が肩入れした結果、その方が負けてしまいました。選挙の供託金は、父親が事業を整理して、返したと聞いています。その後、樺太の炭鉱で仕事をするようになったと聞いています。

私は西柵丹（にっさくたん）小学校に通った記憶があります。小学校四年生で、兄が六年生の時に、兄が恵須取（えすとる）の中学校の試験を受けました。「炭鉱の鉱夫の息子が中学校にいくのか」と言われました。その頃は校長先生の息子とか、炭鉱でいうと所長の息子しか中学校に行かなかった時代でした。

兄が中学に行った後、私も泊居（とまりよる）の女学校（樺太町立泊居女学校）に受験をし、合格しました。兄は中学に行くと寄宿舎に入ったのですが、家に帰ってくると、全身シラミだらけになってきたので、私は、泊居にいる母方の祖父母のところに預けられ、そこから女学校に通いました。

その後、父が西柵丹の炭鉱から三井川上炭鉱に配置転換されました。だから、終戦の時は、家族は川上炭鉱にいて、私は泊居にいました。私の父と母が泊居の祖父母たちの家族の引き揚げのために、泊居に引っ越しをし、そこで父は別の仕事をしていました。女学校は進駐軍にとられて、自宅待機となっていました。

■北海道に移る

昭和二二年に、父、母、私、弟二人、母方のおじいさん、おばあさん、おばさん、その子ども二人で、北海道へ引き揚げました。ちなみに、兄は予科練（甲種予科練）に入っていたのですが、終戦が三日遅れていたら生きていなかったという話をしていました。もう特攻の出動命令が決まっていたのです。

父と母は、自分たちは大家族なので、開拓に入りたいという希望があり、無縁故で、行き先を決めずに北海道に来たようです。受け入れてくれたのが、上川郡の東神楽町でした。

両親は農業をやるつもりだったようですが、私は農業はやるつもりはありませんでした。また、現金収入が欲しかったので、隣町の東川町で郵便局員の募集があったので、採用されました。学校にも行きたかったのですが、引き揚げ者だということもあり、あきらめました。父親はデンプン工場で働き、私は郵便局に勤めることになりました。家を貸してくれた場所は、町内会館みたいなところでしたが、周囲の三軒ぐらいの家が、私たちの生活の面倒を見てくれました。

何年かたち、開拓地が決まり、家族でそこに行ったのですが、米をつくるまでには相当時間がかかる荒れ地でした。馬鈴薯をするにしても、どれだけ苦労するかと、考えたのでしょう。兄はその時、旭川の会社に勤めていたのですが、兄は「百姓をしない」と話をしていました。私は郵便局の勤めがあり、弟は学校に行っていました。じいさんばあさんを抱えていた父と母に対して、兄が「炭鉱に行って、金を稼ぐ。金を送るから、お父さん、お母さんがんばって」と言ったので、母親も泣き出して「私も炭鉱に

行きたい」と話し、一家で炭鉱に行くことになったのです。

■芦別での生活のはじまり

昭和二四年に、一家で芦別に来ました。父が樺太で勤めていた炭鉱も三井だったこと、父親が知っている人が芦別に来たこともあり、三井芦別炭鉱に来ました。樺太の人もずいぶん、三井芦別炭鉱に来ていたようです。

炭鉱に社宅がない時代だったのですが、私たちは四軒長屋に住むことができました。東頼城寺の住職の住まいとして、四軒長屋があったのですが、一舎は、住職の家、二舎と三舎が本堂、四舎が納骨堂だったのですが、私たちは住職の住まいにしていた場所に住むことができたのです。

私の仕事ですが、引っ越しに伴って、配置転換してもらい、芦別の本局に勤めることになりました。当時、郵政と電通が分かれていなく、私は電話交換とか電報の仕事をしていたのですが、早く仕事ができていたので、そういうことできるならば電話の方に来てほしいと言われたからです。

電話交換の仕事は夜勤もありました。ラーメンとかミカンの差し入れや、その他、特別な差し入れもありました。親としては、このような差し入れはうれしいけれど、同時に私をお嫁さんにほしいという話も多く来ました。そこで両親が心配し、「三井の事務所に働かせてもらうことを頼み、決めたから、今年いっぱいで辞めなさい」と言われ、新年度の区切りで仕事を変えました。

三井の会社にいったら、資材課勤務となりました。西芦別の第二売店の配給所で仕事をすることになりましたが、最初は窓口ではなく、伝票整理の事務の仕事でしたが、人が足りないので、窓口の仕事もするようになりました。

■主人のこと

芦別には、社交会というのがあり、若い人が出会い、ハイキング、フォークダンスなどをしていました。私はスクウェアーダンスをすることで、主人と知り合いました。苫小牧などへ遠征なども行いました。職員の奥さんと主人のペアがあり、私は別の人とペアだったのですが、私のペアが優勝しました。

主人との結婚の際ですが、主人はおじさんから「大阪に来てくれ。会社を継がせたい」と言われ、大阪に行くことに決意したのですが、私に対して「二、三年中に迎えに行くから待っていてくれ」と言ってきました。私は「あきらめてください。親が許さないから」と伝えたの

ですが、そうしたら主人が「大阪行きを辞めた」と言ってきたのです。私たちは昭和二八年に結婚することになりました。主人が亡くなった後に聞いた話ですが、「大阪に行くことに送別会もした」とのことでした。

主人の仕事は坑内での測量でした。職員ではありませんでしたが、仕事にはプライドがある人でした。一鉱と二鉱のトンネルがうまく繋がったという話を、子供たちに自慢をしていたことを覚えています。

三井芦別炭鉱の鉱員は、A級、B級、C級と分かれており、A級は坑内の採炭、発破、掘進が仕事で、B級はその他の坑内の仕事、C級が坑外の仕事でした。

当初、主人はB級で坑内の測量をしていましたが、事務的なこともできましたし、労働組合の本部のいろいろな人に頼りにされていました。いろいろな人にアドバイスをしていて、とても苦労をしていることを知っていました。例えば、主人は坑内の測量の仕事の後、労働組合の一鉱の支部長になりましたが、その時は、坑内の人たちから「B級あがりが、本当の鉱夫の苦しみがわかるのか」と言われました。でも、その後、主人が労働組合本部の厚生部長になった時には、坑内の人たちからは「俺たちを見捨てるのか」と泣かれて言われたのです。坑内の人は素朴で、本音の話をするのですが、私はこうした主人の苦労をそばで見てきました。ただ、主人は上昇志向がなかったから、職員になるという感じはなかったです。主人は昭和五七年に五五歳で定年を迎えました。昭和五一年から五九年まで教育委員、平成元年から一〇年まで民生委員、町内会長は昭和五八年から平成一二年まで行い、平成一六年に亡くなりました。

■主婦会について

結婚してからは、西芦別に住みました。近くに親が住んでいました。

今みたいにコンビニがない生活だから、何かあったら、飲み物とかをすぐに出さないといけないという、人の集まる家に育ったこともあり、私は母親を見習って、炭鉱の人がきたら、グラスか、湯飲み茶碗を出して、お酒の瓶を立てて、斗瓶（とがめ）に焼酎とかを、隣の方に借りたりしていました。

炭鉱主婦会の思い出としては、「英雄なき一一三日の闘い」[8]のデモ行進中に「あなたは、唯の体ではないので

8　一九五三年（昭和二八年）、に三井鉱山の人員整理（六七三九人）に対して、三鉱連（全国三井炭鉱労働組合連合会）が行った労働争議で、

から走ってはだめ」と近所の奥さんに注意されたのですが、デモに参加しなくてもいいよとは言われなかったことです。当時、私のおなかの中には子どもがいました。

昭和二九年に娘が生まれました。役員のなり手がいなかったので、兄も組合活動をしていたこともあり、昭和三一年には本部の事務局次長をすることになりました。よい先輩に恵まれていたこともありますが、若いからできたのだと思います。昭和三二年に息子が生まれて、事務局次長を辞めさせてもらいましたが、その頃から「男の子がほしければ、炭婦協の役員を」と言われるようになったものです。昭和三七年に事務局長（三八年まで）、昭和三九年から四〇年に西芦別地区の監査、昭和四一年に副会長、四二年に会長をすることになりました。主婦会の会長をしていてつらかったことは、殉職者の弔辞を読むときでした。主婦会の役員をやっていた方のご主人が亡くなったときは、特に辛かったです。

昭和四三年に主人が会社の労働組合の執行部になったことで、主婦会の会長を辞めることになりました。

三鉱連企業整備反対闘争のこと。一一三日にわたる家族ぐるみの闘争が行われ、会社側が指名解雇を撤回して組合側が勝利した。組合勝利の要因は，（一）職場・地域組織の強化，炭婦協（主婦会）の結成などを通じ大衆闘争を展開したこと，（二）無期限全面ストライキをうたず，当時最も有効な保安順法闘争や部分ストライキなど柔軟な戦術を採用したこと，（三）職員組合（職制だけで組織される組合）との共闘がうまくいき，組合分裂もなかったこと，（四）組合の〈独走も敢えて辞せざる決意〉，などがあげられる。（世界大百科事典 第二版）。

■兄（野呂潔さん）のこと

兄は予科練（甲種予科練）に入っていたのですが、三日、終戦が遅れていたら生きていなかったのです。特攻でしたから。兄は昭和二四年に三井芦別鉱業所に入り、昭和二五年には三井芦別労働組合の給与部長になりました。昭和三〇年には三井芦別労働組合の組織部長、書記次長となり、昭和三六年には炭労全国オルグ団長、昭和三七年には、中央炭労の組織部長と事務局次長、昭和四七年に中央炭労の事務局長、昭和五五年には炭労中央執行委員長になりました。

兄が組合の執行部になるときに、父親は兄に対して、「資本主義社会の中で、組合運動をしても勝てない」と言ったのですが、兄は「おれは（特攻で）生き残ったんだから、やりたいことをやらせてくれ」と話していたことを、私はおろおろしながら聞いたことがあります。これまで兄は父親にたてつくことは無かったのですが。で

も、兄は父親に対しては、鉱員の息子にもかかわらず学校に入れてくれた事に対して、とても感謝していました。

それから、兄は選挙の時は社会党に投票していましたから、父親はそっぽを向いていました。でも、横路さんが北海道知事選挙に出た時には、兄に対して「社会党に入れればいいんでしょ」と言っていましたね。兄は、昭和六二年年に五八歳で亡くなりました。

■主婦会活動の後について

私は、昭和四五年から市役所の嘱託職員として勤めることになりました。炭鉱主婦会の活動は中心的でなくなりましたが、芦別の中央生活学校には籍をおき、つながりは保ちました。

昭和六〇年一一月に、三井芦別炭鉱のOB会ができたので、そこでまた炭鉱主婦会とのつながりができました。三井を定年退職した人が芦別市内に定住することが多くなったものの、市内であっても挨拶程度で昔話をすることもなくなったので、交流を深めたいということで作られた会です。当初は年に二回の交流があり、その後年に一回になりました。そして、佐藤俊江さんが元気なうちにOB会を解散しようということで、平成二〇年五月三〇日に会を閉じました。また、平成一八年四月一三日には、中央生活学校も解散していました。一方で平成二四年九月二九日に「三井ヤマの会」ができ、職員、鉱員、男女関係なく、親睦と選挙対策のための会ができました。

さて、私が行った市役所の嘱託職員の仕事は、「働く婦人の家の指導員」で、女性の社会進出、働く女性が増えてきたことによる困ったことの相談にのっていました。この相談業務は、平成四年三月まで、二二年間していました。

また、昭和四五年から裁判所の調停委員をしていました。芦別市から家にまできて頭を下げられて頼まれ、最初は辞退したのですが、母親から「人様の役にたつことは、自分の勉強になるのではないか」と言われ、民事調停委員を引き受けることになりました。その後、家事調停委員をするようになりました。平成一四年三月まで、三二年間、勤めました。さらに、昭和五七年三月一七日から、平成一九年一一月三〇日の二五年間、保護司を務めました。そして平成六年に藍綬褒章と、平成一五年に瑞宝双光章（調停委員功労で）を受けることになりました。

■主婦会活動を振り返って

主婦会活動をしていたおかげで、仕事に対しても、自

分なりに調査をするようになりました。例えば、働きたい人がどれくらいいるからとか。また、いろいろな面を見ることができたし、自分でやることを、他人の前で、話すことができるようになったのは主婦会活動のおかげだと思っています。

それから、私の活動に対して、他の人に「勉強になりました」と言われたりしますが、それは炭鉱主婦会のおかげです、ということを話すようにしています。

年代に関係なく話を聞くとか、年齢に関係なく、良いことはいい、悪いことは悪いということを、はっきりさせるということができたのだと思います。

でも、（政治的に）右か左か真ん中について、自分の考えを押しつけてはいけないし、こっちを選んだら、こうなるのだとか、さまざまな生き方、物事を選択させるような話をしました。でも、良い、悪いがはっきりしている時は、これは良い、悪いと話をすることができたと思います。

それから、確かに自分の考えを押しつけることはいけないと思うのですが、「これくらいのことは言わなくてもわかるだろう」ということが、今の人はわからないので、言わないとなおわからない。だから、はっきりと教えてあげるということが大切だと思います。子育ても、後で注意をしようと思っていても、注意をすることがおっくうになってしまう。ちょっと時間がなくても、少しでも気づかせてあげることが大事だと思っています。

もちろん、注意をする時は、人がいないところで注意して、みんなが守らないといけない時には、わざとみんながいる前で、注意をするようにしています。それは、周囲の人も「忘れていた」ということになるからです。

この年になって思うのですが、こんなことはわかるだろう、というのは違うと思います。この教訓は、いろいろな人との出会いがあってから、得られたものだと思っています。

聞き書き②　城戸幸子さん[9]

主婦会の教宣の活動から、いろいろ考えるようになりました

■樺太から北海道・芦別へ

昭和一五年四月に樺太で生まれました。樺太に天内（て

9　聞き取りの日時：二〇一六年一〇月二四日、二〇一七年一月二九日。

んない）の炭鉱があり、父はそこで坑内で働いていたと思います。長屋を改造した幼稚園があり、そこに通っていたことを覚えています。昭和一七年に妹もできました。

昭和二三年七月に日本に引き揚げてきました。最後の引き揚げ船だったと思います。函館に帰ってきました。

父が働いていた炭鉱の会社と同じ系列の炭鉱が稚内にありました。引き揚げて来たときに、「稚内の炭鉱に来ないか」と父は言われたそうですが、学校が遠いからと言って、八月に幾春別にある北炭の奔別炭鉱に行きました。

父は坑内の仕事をしていたのですが、父の弟が西芦別にいたので、私たちは一〇月には西芦別に引っ越しをしました。

私たち家族は父の弟のところに同居していました。父だけが頼城の炭鉱に行き、西芦別の寮に父が住んで働いていました。父は寮のご飯が足りないということで、私が家で炊いたご飯を父の元に運んだことを覚えています。

私は西芦別の学校に少し通いましたが、その後、家族で頼城の長屋に引っ越しをしました。頼城のアパート（西町アパート）の近くに、寮や映画館があったのですが、頼城に住むことになりました。実はその長屋は強制収容されていた人が住んでいた長屋だったのです。西町アパートの近くに、強制収容の人を埋めた経緯があります。リンが燃えて火の玉みたいなものがでるそうですが、亡くなった方の幽霊（お化け）ではないか、という話も聞いたことがあります。私は見たことはないのですけれども。

この長屋には一年半ぐらい住み、その後、中町の四軒長屋に住むことになりました。私は頼城小学校、中学校を卒業し、ちょっと習い事をした後、三北商事に勤めました。炭鉱での物品を販売する会社です。地元で仕事をしたい人はたくさんいて、資材課勤務か、三北商事しかなかったのです。

三北商事には四年間働きました。四つ年上の主人とは紹介されて、一年ぐらい交際し、昭和三六年六月に主人と結婚しました。結婚したら、仕事は辞めないといけませんでした。その後、昭和三八年に長女が生まれました。

主人の仕事は、採炭（A級）でしたが、結婚してからだいぶたってから、坑内の運搬（B級）になりました。うちの主人はまじめで、休むことがほとんどなかったです。日曜日でもたまに出勤することもありました。だから、生活に困ることはなかったです。

■炭鉱主婦会での活動

主婦会の役員は、町内の中で推薦されてきまるのですが、私も推薦されました。主婦会の役員だった佐藤フミさんが、住んでいる長屋に来て、「どうしてもやってもらいます」と言われ、役員をやることになりました。

はじめはイヤイヤでした。主婦会の活動の内容も、回覧を回すとか、口頭で伝える仕事をしていました。私は町内の「幹事長」をやり、その後は「区長」も務めました。

さらに、その後、本部の役員の方から「本部の役員をお願いします」と言われ、そのときはあまりやる気がなかったのですが、頼まれて仕方がないな、と思ってやりました。

昭和五一年からは、教宣部長をすることになりました。教宣部長の仕事は、主婦会便り（お便り）の記事を書くことです。記事を書いて紙面をまとめた後、労働組合の教宣部長が記事の内容をチェックしてくれます。

はじめは教宣の仕事を、他の主婦会の活動のように簡単に考えていました。しかし、主婦会便りを出す時には、主婦会の年中行事の内容を入れますが、そのためには全部の主婦会の行事に参加しないといけません。また、年中行事の記事だけでは紙面が足りない時は、記事の内容を増やすために情報を集めなければなりません。これはとても勉強にはなりました。

何より、この教宣の活動を後の人に伝えないといけないし、自分の代で落としてもいけない、という気持ちがあり、毎月、主婦会便りを出すことにとても苦労をしました。

教宣をやるようになり、いろいろな先輩からこれまでの活動を聞かされて、こういう活動をしないといけないと考えるようにもなりました。いろいろ考えないといけないし、こういうこともあるな、と身を入れて考えるようになったのです。

■炭鉱主婦会の会長になる

教宣部長を務めた後、昭和五八年に副会長をして、昭和五九年から会長を務めました。それまでずっと主婦会

の会長をしていた奥山さんのご主人が定年になったことで、奥山さんは会長を退くことになり、私はその奥山さんから頼まれたからです。

私が炭鉱主婦会の会長になったときは、炭鉱での生活も安定していて、暮らしやすかったのです。ただ、生命と暮らしを守るということで、いろいろ活動をしてきました。

例えば、坑内見学は、夫の職場を知らなければいけないという思いで、年に一回、行っていました。ただ、炭鉱主婦会が坑内見学をする時は、歩く場所を整備しなくてはいけないので、組合からは実はいやがられていました。私たちが歩く場所は、「天皇陛下が来るのと同じだ」とも言われましたし、「こんなところで仕事をする人と思われたくない」という話を聞いたこともあります。

坑内見学には、労働組合の保安の人などが、二、三人ついてくるのですが、私は、下の方に行ったこともあります。でも、下の奥は見えないので、「(主人は)こんなところで働いているんだ」と思ったことを覚えています。

結婚した当初の時期は、主人は真っ黒になって家に帰ってきて、新聞紙の上で着替えをさせましたが、坑口浴場ができた後は、きれいになって帰ってきました。だから、坑口浴場ができた後、炭鉱で働き始めた夫をもつ女性は、夫がこんな場所で働いていることがわからない人もいたと思います。

それから、坑口接待は毎年行っていました。坑口から出てきた男性に、そばを振る舞ったり、たばこに火をつけたりしてあげました。また、ビールやジュースも出したりしました。お風呂上がりですから、何杯もビールを飲んだ人もいました。本当は券があって一人一杯までなのですが。

主婦会の会員の親睦をするための勉強会、演芸会も開きました。「会員会」という名目で、主婦会の取り組みをPRするために、各地区に本部役員が行き、主婦会便りでは伝わらない内容を話し、主婦会にかかわる活動の協力要請をしました。一方で、主婦会会員のいろいろな要望も聞いたりしました。もちろん、すぐには主婦会で対応できないかもしれないけれど、少しでも対応をしようとしていました。これは、主婦会の中の生対(生活対策)が行っていました。

三井炭鉱主婦会では、昭和三六年から老人クラブを作りました。頼城が一番早く作りました。理由は、お年寄りがいると家に集まってくるのですが、二番方、三番方

の人を寝かせてあげたいので、お年寄りの集まる場所を作ろうということになったのです。四軒長屋で空き家になっているところを老人クラブにしました。

私たち主婦会は、その老人クラブに入っている人から、親睦のための旅行の企画の相談に乗ってあげて、一緒にその旅行について行ったりしました。

■炭鉱主婦会での活動を振り返って

主人が定年を迎えたため、昭和六一年度で主婦会の会長を辞めました。八年間勤めました。ただ、次の主婦会会長だった及川さんが引っ越しすることになり、昭和六二年から、平成元年まで会長をすることになりました。終わったときは一安心しました。

でも、その後、民生委員もやっています。いろいろな人が相談にきて、それを市役所にもって行き、ほとんどの問題は解決できました。民生委員の活動は、最初は「たいしたことがない」と思っていたのですが、だんだん奥深いものだと感じ、やればやるほど大変なものだと思うようになりました。

今から振り返ると、炭鉱主婦会の会長は少し忙しかったかな、という感じです。家のことを任せることができたからかもしれません。私の家は、子どもが娘一人で、母も同居していたので、食事や弁当は私の母がやっていました。主人は、活動に対しても何もいわなかったです。

聞き書き③　岡部規子さん[10]

三井芦別炭鉱の主婦会活動を引き継いで

■樺太で生まれ、北海道にきました

私は昭和一九年一月に樺太の塔路（とうろ）に生まれました。

私の母親から聞いたことですが、昭和二〇年八月一五日に、ロシアが攻めてきたという話が伝わり、町内会の人が集められて、一人ずつ青酸カリ（赤い紙に入っていました）を持たされて、逃げたそうです。夜に真岡（地名）が真っ赤に燃えている時に逃げて、日中は休んでという感じでした。下水の水を使ってミルクにしたり、木陰で亡くなっている子どももいました。親が不憫だけれども、母親は薬を飲ませて自分たちだけで逃げたのでは

10　聞き取りの日時：二〇一一年一二月二日、二〇一二年六月一一日、二〇一三年三月五日、七月二八日、八月二六日、二〇一五年八月一〇日、二〇一六年八月三日、一〇月二四日、二〇一七年一月二九日。

ないかと、思ったそうです。

九月になってから誰かが「日本が敗戦した」という知らせをしてくれて、私たちは日本に帰国するのではなく、元の家に戻ることになり、しばらく樺太で生活をすることになりました。父親は洋服屋をしていたのですが、ロシア人の縫製工場の工場長として父は雇われたのです。ロシア人は幼い私にいろいろなものを持ってきてくれました。白いパンやバターも得られたので、裕福な生活だったことを覚えています。

昭和二三年六月に、家族で日本に引き揚げました。ミシン一台を頭と胴体に分けて、父親がミシンの頭の部分を背負っていました。この部分があれば、日本に帰ってからもなんとか仕事ができると思ったのでしょう、大事に持って行きました。他には布団などを持って行った記憶があります。ただ、引き揚げの時は雨が降っていて、荷物がぬれてしまうのではないかと心配でした。また、船のトイレが汚かったのと、船の中でのリンゴが大根よりもおいしくなかったということを覚えています。

引き揚げ船はすぐに樺太から出発せず、ずいぶん待たされました。港の近くでテントを張っていて、母方のじいさんがパンを持ってきてくれて、そのパンがおいしかったことを覚えています。

それから引き揚げ船が函館に着いて、いきなり頭からＤＤＴをかけられました。また、パンをくれたじいさんたちは、半年後、ばあさんの実家の岩手に引き揚げました。じいさんは（妻の実家に）お世話になったお礼としてお手伝いとして田んぼを耕していたのですが、最後の田んぼを耕して亡くなりました。だから、私がじいさんに会えたのは、引き揚げ船で別れたのが最後でした。

父は札幌にいた祖母に樺太から家を建てるためのお金を送っていました。しかし、父の姉がそのお金を使ってしまっていて、私たちは上砂川にいた父の姉のところに行きました。叔父は三井炭鉱で働いていました。上砂川の家は長屋でしたから、私たちの家族も多かったので、そこには一ヶ月だけの生活でした。そして、父の下の姉が南美唄にいたので、そこに移り住みました。南美唄の姉の家の二階で生活し、父は洋服屋をやって生計をたて

ました。ただ、南美唄の家の二階の階段はとても急で、昭和二一年に生まれた私の弟が二階から落ちて怪我をしたので、引っ越しをすることになりました。

そこで、父親の兄の奥さんの家が歌志内にあり、そこを頼ることになりました。父親は商店街に家を借りて、紳士服の仕立て屋の仕事を始めました。歌志内の生活に慣れた頃に、家主より立ち退きを言われ、生活が大変な中で、親子無尽講をやってもらい、家を買うことになりました。仕立てた洋服代金は、分割であり、収入は予測が立たない中で、両親はその支払いに本当に苦労して、それを目の当たりにして暮らしました。私はその苦労があったので、本当に商売は大変だと思っていました。

私は、歌志内町立神威小学校、中学校、歌志内高等学校を卒業し、高校までは歌志内に住んでいました。その後、親の手伝いをしてましたが、二〇歳になって札幌に出て、洋服を売ったり、反物の注文を受ける仕事を約三年することになりました。

■結婚して、炭住での生活に入る

昭和四四年に、三井芦別炭鉱で働く主人と結婚しました。母親の妹たちが、頼城に住んでいたので、炭鉱の方とお見合いをしました。私の実家は商人で、毎月給料が入ってこない生活だったので、実は（お見合い相手は）安月給でも毎月給料をもらえるサラリーマンがいいと思っていました。主人は、もともとはお菓子の職人でしたが、親戚に勧められて炭鉱で働くようになりました。主人は、部内運搬（坑内の運搬）の仕事をしていました。

炭住での生活には、家賃、水道代、電気代は、会社の福利厚生としてかかりませんでした。特に石炭は一年間に九トン支給され、薪は二トン車で二台分もありました。実家では石炭は買って使っていたので、「炭鉱は豊かだなぁ」と思いました。また、余った薪を売ったり、余った石炭を車庫の中にひいたりしている家もあったので、それも驚きました。だから、炭鉱で生活をしていると、手に取った給料は、すべて自由に使えるという感覚で、そう思った鉱員が多かったと思います。

上の子が一歳になった年の一〇月に、夫は右足の足首の怪我をしました。二番方の時でした。夫はその日は自宅に帰ってきたのですが、次の日に三井の炭鉱病院に入院しました。そこでギブスをしたのですが、私がお見舞いに行くと、主人はとにかく寝汗をかいていて、私はこれはおかしいと思って、美唄労災病院にさげて（移して）

もらおうと考えました。炭鉱の病院の医者は、固定ではなく、週末は札幌の自宅に帰ってしまうからです。なんとか、美唄労災病院に移ることができましたが、治療には約半年かかり、次の年の五月すぎまで入院をしたのです。

炭鉱での生活は、良い部分もありましたが、怪我をすると特に大変だと感じました。

■三井芦別主婦会の活動――労金と試買量目調査

三井芦別炭鉱主婦会が立ち上がった時は、物資の無い時代でした。夫の生命を守らないといけない、自分たちの生活を守らないといけないので、斡旋事業、例えば、毛糸を卸値で卸してきて、芦別の街中のお店より安値で会員に渡すということも行っていました。

私は結婚してから、炭鉱主婦会に入りました。ただ、会員としての活動としては、選挙の時に食事のお手伝いをしたぐらいでしたが、主婦会活動の中で印象深い活動の一つは労金（労働金庫）の利用を勧めることと、その労金に、「越冬資金」という形で積み立てておいて、それを九月に下ろして、冬の支度用に各自が使うようにしていました。漬け物を漬ける時期に、野菜の他、下着やセータなどの物資を買い求める人が多いため、主婦会では場所を変えて、皆さんに斡旋しました。

また、試買量目調査といって、食料品などを秤で量り、料金を調べ、どのお店が良心的か確かめる試みを行っていました。実はこの調査は、商店街の方から嫌がられたのです。炭鉱主婦会の人は、大量に物品を買うけれども、安く販売しないといけないし、試買量目調査は商品のクレームにつながるからです。

■炭鉱主婦会の会長として

下の子どもが幼稚園の時に、「母の会」の会長になりました。幼稚園の園長が会社の労務で、小学校のＰＴＡ会長だったこともあり、その後、私はＰＴＡの副会長と会長をやることになりました。また、中学校のＰＴＡ会長もやることになりました。

当時の炭鉱主婦会の会長の高島さんから、主婦会の役員をやらないかと言われたのですが、私は不器用なので断っていました。ただ、息子が中学を卒業し、高校生になったので、平成元年、私が四五歳の時に、主婦会の監査を一年間引き受け、その後に主婦会の会長を引き受けることになりました。会長だった城戸さんのご主人が定年となったので、私は平成四年九月の閉山までの二年半、

会長をしました。三井芦別炭鉱主婦会出身で、炭婦協（炭鉱主婦協議会）の会長をした佐藤俊江さんは、炭鉱主婦会での活動経験が浅いにもかかわらず、どこでも私の顔を立ててくれました。だから、他の炭婦協の先輩方（元会長の一戸さんとか）も普通に対応してくれました。

ただ、少し前から、主婦会にあまり関心がなく、活動の経歴がない人が主婦会の役員になっている感じはありました。主婦会の会員の中で働いている人も多くなり、そういう人は主婦会の活動は任せていて、会費も「くれてあげる」という感覚があったと思います。だから、私が他の役員の人に対して、例えば化粧品の斡旋の活動を教えながらしてもらいました。また、主婦会の会計なども一から教えました。私も含めて一丸となって取り組みました。ちなみに会計を教えた人は、閉山後、そのノウハウを生かして仕事に就くことができたそうですが。

それから、私が主婦会の会長をしていた時は、大規模な合理化と人員整理があった後で、何とか第八次石炭政策が継続できるように、東京の三越の隣にあった三井の本社や、国会に行き、皆さんと一緒に行動し、運動してきました。

ただ、昭和六二年、六三年と大規模な合理化があり、基準退職制度によって六三名の希望退職が募られました。基準退職制度というのは、本来の炭鉱の定年は五五歳ですが、五五歳時の退職金を五二歳で受け取れる制度です。その後、基準退職は五三歳となりました。そうすると、失業保険で一年、黒手帳で一年と言うかたちで五五歳から年金を受け取ることができます。しかしながら、合理化によって一時的にお金が入る一方で、男性は今後の仕事の行き先が不安で、お酒に走り、女性問題などもあったりして、すごく荒れた生活をしてくる人もでてきました。また、当時はパチンコがはやっていて、主婦会の女性の中でもパチンコに興じていた人もおり、お金をパチンコに使ってしまい、家に帰れないからお金を貸してほしいと言われたこともあります。

さらに、会社は、特に出向と言う形で半年ごとに人を入れ替えて、（労働者が）川崎の方へ出て行ったという経緯もあります。そのため、若いお母さん方が、芦別に残されてしまうことになり、留守家庭が多い中で、主婦会の活動を続けることは大変でした。

そこで子どもがいる若いお母さんたちを中心に、主婦会でスポーツのサークルを始めました。以前から主婦会ではサークル活動はあったのですが、昭和六一年くらい

に一時休止していました。バレーボールとハンドテニス（テニポンと呼んでいた）をして、日中に少しでも身体を動かして汗をかいて、そして集まって話すことができると考えたからです。

このバレーボールのサークルは、閉山後も続きました。芦婦協（芦別婦人団体連絡協議会）の活動の一つである、資金造成演芸会なども手伝ってくれましたし、地域の結びつきができてよかったと思っています。

■閉山を迎えて

閉山闘争においては、労働組合の家族会・主婦会の集まりである主婦協だけではなく、芦別市の婦人団体の連合体であった芦婦協も、閉山反対運動に入ってくれました。しかしながら、三井芦別炭鉱は、平成四年九月二八日に閉山となりました。三井芦別主婦会も同じ年の一一月に閉会することになりました。閉山記念誌を作るのは大変で、自分でもいろいろと書きました。労働組合は協力的で、「岡部さんがやるようにすればいい」とは話してくれました。

ただ、閉山の時は私の夫も四九歳でしたので、年金の受給までしばらく時間がありました。芦別の野花南という場所で冬は除雪、夏はU字溝をつくる東田工業所に再就職をし、五九歳まで勤めました。

閉山後の生活の中で変わったことは、これまで会社が肩代わりしてくれた家賃や光熱費などを自分たちで払わなければならないことです。中には、今までと同じように電気を使っていて、請求された電気代をみてびっくりし、電気を使うのを減らした人もいました。

また、芦別には、三菱芦別炭鉱、三井芦別炭鉱、油谷鉱業、高根炭鉱、明治炭鉱と五つの炭鉱があり、町の中では五山の市（市場）が立つだけあって、それぞれが独立していました。三井地区も、三井傘下、三井の傘の中にすっぽりと入っている形で、病院も学校もある、という地域なのです。そこだけで地域を作ってしまって、ヤマで楽しく炭鉱の人たちで色々と運動会などを行っていましたから、閉山後、地域の人々がなかなか町に寄らずに、交わっていかないという側面もありました。

■閉山してからの生活

私は、閉山と同時に、上芦別に引っ越しをしました。そして、そこで主任児童委員をやるようになりました。また、私は平成四年には教育委員に声がかかり、教育委

員をすることになりました。ただ、女性は私一人だけでした。

さらに、平成七年に芦別市議会議員に立候補することになりました。高嶋寿子さんが七期市議を務めた後、私は営林署の運動の誘いを受けたのです。なんとか三期、務めさせていただきました。この選挙の時にも、佐藤俊江さんは応援してくれました。私が老人クラブの会長の時に、車椅子を持参して、佐藤俊江さんと一緒に老人クラブの旅行に行き最後まで楽しむことができました。私なりの御礼はしたつもりです。

ただ、私は女性でたった一人の教育委員だったので、自分が市議会議員に立候補したことで、教育委員を途中で退任してしまったことは、現在でも女性の教育委員がいないので、とても申し訳ないと思っています。子どもの教育に関して、女性が意見を言える場所を私自身が崩してしまったと思うからです。

私は人の前に立つのは、子どものためだと思っていました。PTAの会長も、炭鉱主婦会の会長、教育委員や市議会議員になりましたが、どれも勉強をさせてもらったと思っています。

聞き書き④　西村ツヤ子さん[11]

生活学校がヤマとのつながりを保ってくれました

■私と炭鉱（ヤマ）

昭和九年七月一日に、三笠市幾春別に生まれました。

私の父は、幾春別の奔別炭鉱で坑内の仕事をしていました。でも、炭住ではなく、炭鉱の近くに自宅を建てて住んでいました。ですから、小さい時の炭住の記憶はありません。

そして、小学校一年生の時に父がなくなりました。炭鉱での事故だったと思います。

私は六人きょうだいの四番目でした。一番上の姉がそのとき郵便局で働いていましたが、生活が大変なので、父の死後、母は選炭場で定年まで働いていました。だから、母方の祖母が、私たちの生活の面倒を見てくれました。

私は、幾春別小学校、幾春別中学校を卒業して、その後、岩見沢の営林署の幾春別事業所に九年勤めました。仕事は事務でした。叔母が上芦別にいるのですが、私が

11　聞き取り調査日時：二〇一〇年九月一二日、二〇一六年一〇月二四日、一一月一二日。

いつまでたっても結婚をしないので、主人を紹介してくれました。しっかりしている人だという印象でした。二年間交際して、昭和三四年に結婚しました。

主人は東京生まれで、終戦前の昭和二〇年五月に、おじさんの紹介で西芦別に一家で引っ越してきました。三井芦別炭鉱の三機製作所に勤めることになり、長屋もあたったので、そこに住むことができました。主人は、坑外の電気課として採用され、家の中の電気器具の修理や電柱の仕事をしてました。

昭和三七年一二月に三機製作所を分離して、株式会社三機製作所になったのですが、そこで仕事を辞めて、坑内の採炭に入りました。二年間ぐらい働いたでしょうか。主人はそこでの仕事が合わず、休んでばかりであったので、保安の係としての試験を受け、保安係員の資格を取り、職員になりました。主な仕事は発破屋で、発破の監督をする仕事でした。

■炭鉱主婦会と職員組合の主婦会

昭和三五年に長女が、昭和三九年に長男が生まれました。炭鉱主婦会には、結婚した時から入っていましたが、下の子どもが幼稚園に入った時に、西芦別の西区の幹事長をやるようになりました。仕事は回覧を回したり、主婦会の行事の前の集まりに参加したりしていました。昭和四六年から生対（生活対策）の委員、昭和四七年から四八年まで西芦別支部長を勤めました。

主人が職員になったので、昭和四九年度で炭鉱主婦会を辞めて、職員組合の主婦会に入りました。職員組合の主婦会は、行事は特になかったと思います。職員組合の主婦会の会長さんは、仕事でなくなった方がいる時は、お参りに行くと言う話は聞いたことがあります。

■生活学校とのつながり

職員の主婦会は何も活動がなかったので、私は生活学校だけは続けていこうと思いました。生活学校は勉強にもなるし、それまでの仲間もいたからです。

芦別に生活学校ができたのは昭和四一年のことでした。西芦別の三井地区は、三井芦別炭鉱主婦会を母体として第一生活学校、本町は本町婦人会を中心として、第二生

活学校ができましたが、これは個人での加盟でした。他にも、三菱芦別炭鉱や営林署の人が入っていた上芦別生活学校や、旭、野花南の各町内でも生活学校がありました。

私は生活学校では、体に良いという理由で牛乳を利用する運動や、商店が衛生的にいいかどうかの調査をしました。これが試買量目調査[12]につながっていきます。また、牛乳パックの回収も行いました。牛乳パックを空き家に集めると、扉を開けるとひどいにおいがします。私たちは牛乳パックを開いて洗って、一〇〇枚にまとめて、旭川の会社に販売していました。この牛乳パックの回収の活動が、芦別市の細かいごみの分別につながっていると思います。今でも七種類のごみを分けるのです。

その他、ポストハーベストの問題に関してや合成洗剤に関する勉強会や、安くて添加物がないハイム化粧品の共同購入なども行いました。

■新しく生活学校をつくる

炭鉱で働く人は、定年になると、炭住をでていかなければなりませんでした。

主人も定年になり、家を建てるかと思っていた時に、ちょうど芦別市で中央団地の土地の斡旋がありましたので、早速申し込みをして、家を建てて、そこに住むことになりました。中央団地といっても、農家の跡地で、町の外れにありました。私はこの中央団地の婦人会で会長や副会長などを長く続けました。

そして、昭和六二年に生活学校を新たに作り、中央生活学校としました。名前の由来ですが、中央団地だからではなく、西芦別（三井地区）、本町の真ん中にあったので、中央生活学校という名前にしたのです。中央生活学校は、他の生活学校と一緒にイベントなどを行ってきました。先ほど述べた牛乳パックの回収、その他の資源のリサイクル、消費生活展の開催、生活者会議などで物価の問題を話しあいました。

生活学校は地域での婦人会が母体になったり、炭鉱主婦会が母体になったりしましたが、同時に選挙の時には、生活学校にも声がかかりました。三井の定年者が移り住んだ中央団地で、中央生活学校を作った理由は、三井で働いていた方が定年となり、婦人が学習し、活動する場として、生活学校を作ったからです。あくまでも生活学校は学習や活動のための組織ですが、同時に選挙の時に

12　食料品などを秤で量り、料金を調べ、どのお店が良心的か確かめる試みのこと。

は、候補者に関する声がかかる場でもありました。仲間がでるから応援しようね、という感じです。

そのほかに、三井芦別ヤマの会という、三井芦別炭鉱に関連したOB会もあり、私は主人と参加していました。この三井芦別ヤマの会は、職員も鉱員も、男性も女性も関係なく、参加が可能でした。この会は、レジャーランドに行ったり、会員の懇親が目的でしたが、この組織は選挙のための組織で、選挙の時には「この人に投票をお願いします」という話が回ってきました。当選をした議員は、ヤマの会の会合で挨拶もあったりしました。

それから、三井芦別炭鉱主婦会OB会にも参加し、役員も務めていました。

■生活学校にかかわって

今から振り返ると、炭鉱主婦会や生活学校での人とのつきあいができたということが、とてもプラスだったと思います。何かの役職に就いたときに、自分はとても不安でしたが、依頼をしてくれた人から信頼されていると思って、私のような者でも頼まれるということだから、私でもいいかなって思ってがんばってきました。大変なこともありましたが、楽しさが多かったと思っています。

私はもっと気が弱かった、おとなしかったのです。でも、外にでてから強くなったと思います。お舅さんからも主婦会に入ってから「すごい」と言われましたし、私は食事の準備をきちんとしてから外に出るので、主人も舅も褒めていたし、どこに出てもいいよと言われました。主人からは反対されたことはありませんでした。

聞き書き⑤　前田栄子さん[13]

自分たちで課題を見つけて、学習をしながら、解決に結びつける場が生活学校でした

■農家に生まれました。高校には行きたかったのですが…。

私は昭和一六年一〇月二五日に、芦別市の野花南町で、四男三女の長女として生まれました。生家は農家でした。小作が多くいた時代でしたので、私たちの家族も、二町たらずの田んぼの小作人でした。お米を作っていました。

私は、私の両親と父親の両親（祖父母）と、父の弟二人と妹一人がいる中で育ちました。だから、私は父の二

13　調査日時：二〇一三年三月五日、二〇一七年一月二九日、三月一六日。

人の弟（四歳年上のおじさん、二歳年上のおじさん）と一緒に学校に行きました。それから大学生ぐらいの男性が、援農隊として住み込みでいたのを覚えています。

戦争中の記憶はあまりありませんが、防空壕に逃げた記憶があります。それから、夜中に男性が一人、自宅に逃げてきたことを覚えています。この町には収容所（頼城の奥にあったらしい）があったので、そこから逃げてきたのではないかと、母親と父親が話していたのを覚えています。はさぎ（稲を干す棒）を積んだところに、その男性を隠し、そして、釜に残っていたご飯をおにぎりにして、持たせて逃がしたと思います。

私は野花南小中学校に通い、昭和三二年三月に卒業しました。卒業後は実家の農業を手伝うことになりました。夏は農業を手伝い、仕事がない冬は「花嫁修業」を行っていました。洋裁や和裁は野花南町の公民館で、編み物は本町地区のミシン屋で習いました。

私は高校に行きたかったのです。父は古い人間で、「女に学問はいらない」という判断をしていました。実は私は教員になりたかったのです。特に小中学校でひかれた先生がいたわけではないのですが、そんな夢を持っていました。そのことを口に出してはいないのですが、親に察知されていて、私が学校から帰って本を読んだり、勉強したりしていると、「外で仕事をしろ」「本を読む時間があるならば、家の仕事をしろ」と言われたのです。

当時の農業は機械がなく、馬と人力で行っていたので、とても大変でした。だから、結婚するときは絶対、農家に行くまいと思っていました。今となっては、その時の苦労が、心身共にいきていると思っていますが。

■夫との結婚

私は、昭和三八年一一月にお見合いで結婚をしました。夫は営林署に勤務していました。

営林署の職階は、職員、基幹作業員、定期作業員とあるのですが、夫は、最初、基幹作業員で、当時は常用作

業員と言われていました。仕事の内容は、重機の運転でした。

職員は毎月給与がもらえますが、他は日額で仕事をした分だけお金がもらえるという仕組みだったと思います。特に定期作業員は、四月から夏までの仕事で、秋になると退職扱いになります。「次の年の四月に自分は使ってくれるのかどうか」という不安もあったと思います。

結婚前には、「営林署はいいよ」と言われたことがあるのですが、実際に夫と結婚してみると、営林署での待遇が違いました。例えば、有給休暇の日数が違うのです。常用作業員は五日から一週間ぐらいで、職員は二十日ぐらいあったと思います。

そのような待遇の差を変えようというのが労働組合の目的でした。女性（婦人）も、労働組合に協力をするようになりました。そして、労働組合の運動をしたことで、昭和四四年に、夫も職員になることができました。職員には事務と現場に分かれていたのですが、夫は現場の職員になれました。

■全林野上芦別分会主婦会の活動

先ほど話したように、営林署の労働組合――全林野――の活動は活発で、労働組合ができた後、主婦会ができました。私は全林野上芦別分会主婦会に参加していました。この主婦会には、管理職以外（係長までは組合員）の婦人が関わっていて、一二〇人ぐらい参加していました。私は、結婚後すぐに主婦会に入り、班の活動はしていましたが、子どもが育つまでは、それほど活動はしていませんでした。

長女が昭和四〇年一月に、長男が昭和四四年一一月、次女が昭和四七年二月に生まれました。次女が生まれた後に外に出るようになりました。主婦会の班会議、班長会議などがあったのですが、ちょうど次女が二、三歳の頃から関わるようになりました。班長の役割は、上の役員の方からの活動内容を班員に伝え、さらに班員の意見をまとめることです。班長が理事会に出席します。その後、私は、全林野上芦別分会主婦会の事務局長を務め、最後は会長をしました。

主婦会の活動内容は、生活上の待遇改善を求める活動が中心でした。

結婚してすぐに、上芦別町の二階建ての事務所を改装した官舎に住むことになりました。その官舎は台所や下屋のお風呂の排水溝もなかったので、排水は裏の畑に流

れていました。その後、排水溝を作ってもらい、お風呂を家の中に入れてもらいました。

その後引っ越しをして、平屋の官舎に住みました。間取りは八畳の居間と六畳が二間あり、台所が四畳半でした。二軒つながっている木造の平屋は、寒かったのでレザーを張るとか、モルタルを塗ってもらったりしました。これらの問題は私の家だけではなく、多くの家に共通した悩みでした。主婦会は、労働組合の主婦会担当者を通して、署長交渉の場を作ってもらい、主婦会独自で署長交渉を行いました。

それから、子どもの遊び場がないので、空き地にブランコや砂場を国家公務員の敷地内に作ってほしいと営林署の厚生係に働きかけたり、署長交渉を主婦会として行ったりしました。

昭和二十九年の洞爺丸台風があって、山が荒れたので、その処理のために営林署で大量に人員確保を行いました。だから、私たちと同年代の若者がたくさんいて、家が足りなかったのです。また、当時は、職員が毎年結婚する時代だったので、官舎が足りなくなって、寮やアパートを壊して官舎にしていました。芦別市には、上芦別営林署と芦別営林署の二つがあったぐらい、森林資源が豊富で、職員も多くいたのです。その後、この営林署は統合されて、現在では、空知森林管理署となっています。

平成九年三月に夫が定年退職したので、私は主婦会の会長を辞めました。三井芦別炭鉱主婦会のように、主婦会のＯＢ会はできませんでした。主婦会では、女性の芦別市議であった高嶋さんやその後を継いだ岡部さんを応援していたので、「選挙の時に声をかけるためにＯＢ会は必要ではないか」と思い、ＯＢ会を作ろうという提案をしたのですが、明確な反対はなかったのですが、「別にいいのでは」という感じで、ＯＢ会はできなかったのです。

■生活学校運動について

芦別市における生活学校運動は、芦別婦人団体連絡協議会が柱となり誕生しました。

昭和四一年に第一生活学校が三井地区で誕生し、昭和四四年に第二生活学校と旭生活学校が誕生しました。全林野上芦別分会主婦会は、「主婦会ぐるみで生活学校に入ろう」ということになりました。最初は第二生活学校に入りましたが、昭和五一年に上芦別生活学校として独立しました。地域性や利便性を考えてのことです。私は

昭和五四年度から、上芦別生活学校の運営委員長となり、昭和六二年度からは芦別市生活学校連絡協議会の会長も務めました。

生活学校運動と主婦会活動の違いですが、まず、活動範囲が違います。主婦会は自分たちの生活環境に関わる活動や、夫の職場環境を守る活動をします。つまり夫の職場単位の活動です。生活学校の活動は、芦別市全市的な活動です。また、活動内容や活動のやり方も異なります。主婦会の活動は、環境衛生や子どもの遊び場に対する改善要求や、夫の職場を守るための活動でした。

生活学校運動は、日々の生活に関わるテーマを扱うという点では主婦会の活動と変わりませんが、自分たちで課題を見つけて、学習をしながら、解決に結びつけるというところに違いがあると思います。

私はどちらの活動も大事でしたが、達成感があったのは生活学校の活動でした。自分たちの活動で、全市的に変わってくるからです。例えば、ゴミ捨て場の問題について、それまでは芦別は埋め立てだったのですが、ゴミの埋め立てによる汚水の問題をどうするのかということを、いろいろなところに学習をしに行き、「これは問題だ」ということで芦別市に要望に行きました。

牛乳パックがバージンパルプだったので埋め立てをしない方法を考えていたのですが、その後、倶知安町で牛乳パックの再生をしている工場があることを知り、自分たちで牛乳パックを集めて工場に送ることができるのではないかと考えました。その結果、牛乳パックを分けて回収するようになり、さらに、芦別ではゴミの分別収集を細かく行っています。市民からは「分別が面倒くさい」と言われますが、現在でも埋め立てができるのは、きちんと分別をするようになったからだと思います。

また、除雪については、他の町では大通りはきれいに除雪されていますが、住宅街は除雪されていないことが多いのですが、芦別市は違います。交渉に何年もかかりましたが、ちゃんと除雪をしてほしいという運動を行いました。

その他、歩道の真ん中に電柱があったので、それはおかしいということで、本町の住民と、生活学校で要望を出して、移設をしてもらいました。また、低床タイプのバスがほしいと中央バスに要望しました。バス会社の人は「いくらかかると思っているんだ」と断られたのですが、何年もかかって交渉をしました。その結果、芦別市役所

の前で中央バス側が低床のバスをお披露目に来ました。

今となっては当たり前になったことを見ると、「これも私たちがやったんだよな」って思います。芦別市市議や芦別市生活学校連絡協議会会長などを務めた高嶋さんは、消費者協会と生活学校の違いについて、「消費者協会の活動は、あくまでも消費する側の話であって、生活学校の活動とは違う」と話していましたが、私もそう思います。消費者協会は、消費者の立場で活動をする団体です。生活学校運動は、生活者の立場で活動をします。

生活者とは、生産者も、事業者も、消費者もすべての人に当てはまるのです。「消費者と生活者の違いを大事にしなさい」と、生活学校の先輩に言われてきました。

例えば、灯油の価格の問題に対して、消費者協会は、「灯油が高く、安くしてほしい」と事業者に申し入れをします。一方で、生活学校運動では、物価問題懇談会という会合を開きます。この物価問題懇談会には、事業者や行政（芦別市の助役も含まれる）、そして私たちが同じテーブルについて、空知管内の灯油の値段を調べた上で、歩み寄りながら、話し合いをするのです。確かに値段がすぐに下がるというわけではないのですが、業者同士で価格に大きな差があったものが、より小さくなったという効果があります。灯油に限らず、理容、美容代金、クリーニング代金なども、小さな町の中の業者でも、価格に大きな差があった時代でしたから、この物価問題懇談会は生活者にとって、とても重要だったと思います。

ここまで、生活学校運動の活動を話してきましたが、生活学校だけでは、全市的な活動はできていません。生活学校と、芦別市婦人団体連絡協議会（芦別市の女性団体が加盟する組織）、芦別地区主婦協議会（労働組合傘下の主婦会、家族会）の三つが、「生活者会議実行委員会」を構成し、活動をしてきました。この生活者会議実行委員会においても、行政や事業者、場合によっては学校関係者が一堂に会し、さまざまな課題の解決のために話し合いをしました。

残念ながら二〇一七年三月に芦別生活学校が終わりを迎えます。メンバーの高齢化が原因です。ある五〇代の女性を後継者にしようと期待していたのですが、体調不良になってしまい、生活学校の新しいメンバーを育てることができませんでした。結局、最後は一五人となってしまいました。今は、労働組合にも入らない時代であるので、貴重な時間を割いて、みんなで集まって、学習をするという時代ではなくなったのかもしれません。

■主婦会、生活学校運動に関わって思うこと

私が結婚して長女を産んだ時に、芦別の労働会館で、婦人の集いというのがあったのですが、主婦会から情報が流れてきて、参加しました。その婦人の集いで、高嶋寿子さん、滝沢哲子さん（婦連協）、水上キクノさん（婦連協）などが大先輩の女性の人がいろいろな話をしていたのを見て、えっと思ったのです。女性が、こういうところで、話をしてもいいんだ、できるひとがいるんだ、って思ったのです。私はいままで女性が人の前で話をするのは、学校の先生しかみたことがなかったので、すごく新鮮で、驚きました。

でも、私自身は、中学校までは、通知表には「積極性が足りない」と書かれていました。でも、中学校の何年生の時か忘れましたが、生徒会の役員の選挙があって、会長の応援演説があって、なぜか私がやることになりました。その時に担任の先生に「おまえもやればやれるんだな」っていわれて。私は思ったことを言っただけなんだけれども、と思いました。

中学校を卒業する時に、先生や友人に一言もらうためのサイン帳を持って行ったのですが、担任の高橋先生から「機会（チャンス）をつかめ」と書いてくれました。当時はなんとも思わなかったけれど、人前で少しずつ話をするようになったときに、これがあの先生が言いたかったことだとわかったのです。

高嶋さんをはじめとした先輩のいろいろな話のしかた、行動が、今の私のきっかけになったと思います。

「どうせ女は」とか、「女性の地位を考えてよ」とか言われたりするのですが、逆に「何かやってよ」と私がいうと、周囲はいやっていう反応をします。そういう反応の仕方はだめだと思います。やってみてだめならばだめでいいのだと思うのです。私は、失敗しながら、いろいろなことをやらせてもらったと思っています。言葉で女性の地位を向上させてよ、というのではなく、自分でも何か役割を与えられたら、行動で示していかないと思うようになりました。

【参考文献】

大門正克（編著）、二〇一二、『新生活運動と日本の戦後――敗戦から一九七〇年代』日本経済評論社
藤井和佐、二〇一一、『農村女性の社会学－地域づくりの男女共同参画』昭和堂
アンドルー・ゴードン、二〇〇五、「五十五年体制と社

会運動」歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座10　戦後日本論』東京大学出版会、二五三―二八九頁。
原山浩介、二〇一一、『消費者の戦後史』日本経済評論社。
鎌田とし子・鎌田哲宏、一九八三、『社会諸階層と現代家族―重化学工業都市における労働者階級の状態1』、御茶ノ水書房。
鬼嶋淳、二〇一二、「生活学校運動」大門正克（編）所収。
日本炭鉱主婦協議会北海道地方本部、一九七三、『研山は知っている』北海道機関誌共同印刷所。
満薗勇、二〇一二、「新生活運動協会―一九六〇年代半ば～一九七〇年代」大門正克（編）所収。西城戸誠、二〇一八（刊行予定）、「産炭地の女性たち」中澤秀雄・嶋崎尚子編『炭鉱と「日本の奇跡」』青弓社。
西城戸誠・大國充彦、二〇一七、「生命と暮らしを守る：住友赤平・空知・夕張炭鉱の炭鉱主婦会の聞き書きから」『人間環境論集』一八（一）：六六―二七頁。
嶋津千利世、一九六四、「炭婦協のあゆみ」日本炭鉱労働組合編『炭労十年史』六七一～八四八頁。
玉野和志、二〇〇五、『東京のローカルコミュニティ』東京大学出版会。

付記：本論文は、西城戸が全体の原稿を執筆し、大國がチェックを行い、西城戸が再度、全体の加筆修正を行った。調査は西城戸・大國に加え、井上博登（調査当時、札幌国際大学教員。現在、北海道赤平市学芸員）によって行われた。なお、本研究は、科学研究費「東アジア産炭地の再定義：産業収束過程の比較社会学による資源創造」（研究代表者：中澤秀雄）の研究成果の一部である。